

934

934

記本

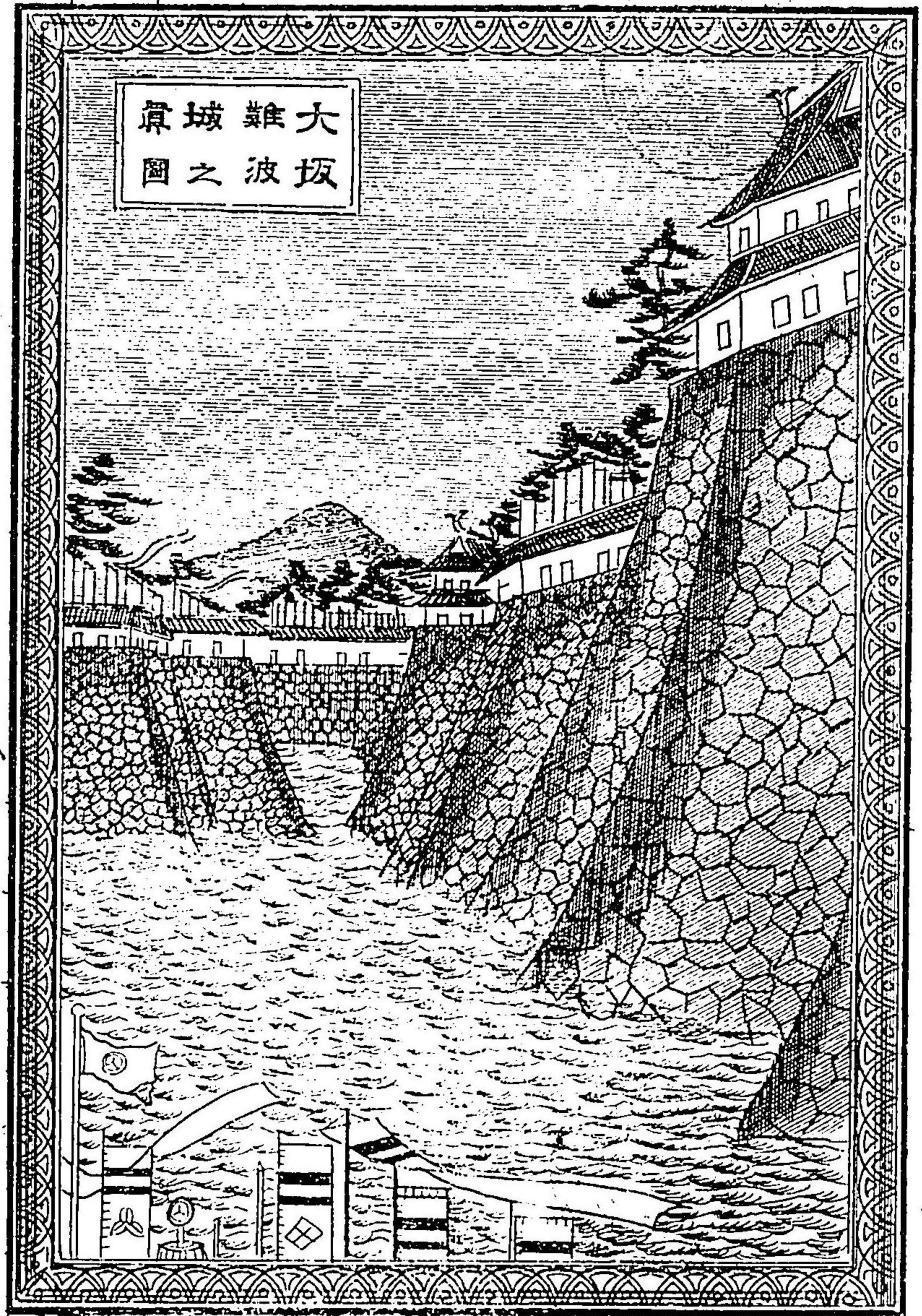
真田三代記

全

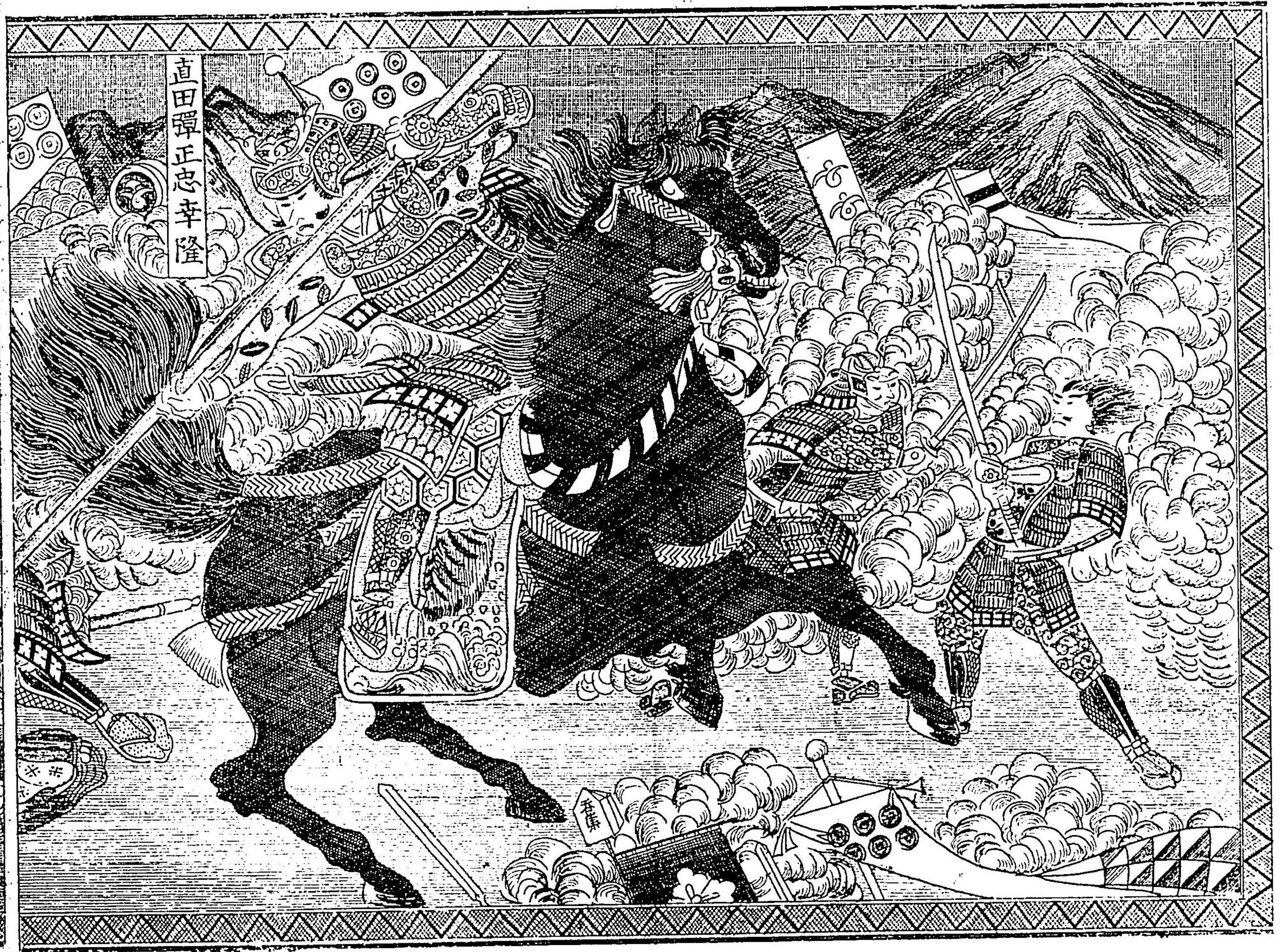


No 1859 / 23

大難城
坂波之圖









約日見火
燃當鳴
鼓大呼

海野小左衛門

相木森之助



直田彈正忠幸隆

真田幸隆
清和源氏の庶流
海野小太郎幸氏の後胤として武田清光が其勇を知て客分と為し置たり幸氏が子孫武田家仕へ真田の改の累代の長臣に例す末孫真田次郎三郎幸義の嫡男たり英才聰明一戦切多し頃永正十六年三月下旬加賀美田郎の城攻の時幸隆は後陣に在り見物して居たり一が家臣穴山小左エ門を呼んで申ける今日の日合戦は十兵工が勇力天晴と思ふなり方便を以て算を我家來させずんば有べからずと申ける所は今落城と見へて本城は火のり燄々と燃上り煙の中より一人の壯士大長刀を打振鬼神と呼れ相木森之助とい我事と名乗るは十八騎追切落しぬ幸隆是を見て吾此者を生捕て即ち尋せんと



相木森之助

と土間の野に戦ひしは真田偽りて逃行を迫りけし八度もあやつまに草尾長藏走り奇て相木が馬の前足を焼けれは森之助勇なりとも堪兼佐と落皆々千取足取くくのんとするを三人までけし大勢折直り終に繩を引せしは幸隆大い喜び我陣を引せしは真田自ら本林之助の繩を引し御遊の主人信虎公の近臣に任入ある故家破亡す主人四郎殿家再興の手段も有夫是我館に居まおし真田が情は涙を流し主従の血をなし後真田家第一の臣とされけり



八月武田上
永録四年 辛酉
真田昌幸
秋川中島の戦い
八月武田上
永録四年 辛酉
真田昌幸
秋川中島の戦い
八月武田上
永録四年 辛酉
真田昌幸
秋川中島の戦い

八月武田上
永録四年 辛酉
真田昌幸
秋川中島の戦い



房守昌幸の官一番乗味方の
 為に瀬踏せん渦巻たこ川中
 打入り昌幸馬上の速者成
 白波立て渡りけりま水深けれ
 の馬の首と甲の鉢より白波
 の中に見えしが難なく川の
 向ま打渡り武者振ひいて
 亮爾と矢も有様は希代の
 勇將なり直江を見んて
 敵の川を渡りそ失王
 て締めまよ下知なま
 ま危く及へける處へ質

村幸田幸



和江の中
 秀忠公の御前
 其時三十三歳七十五歳
 定発向有森田幸村天田國平
 安中松井田日出東西若古本橋
 百五十騎を前後三千は徳川
 も御座り 眞田幸村
 なんと思ふ折柄
 時分はしと左右の
 大河一回り放せり

家康公

江山下深田等根津等
 合けり高攻陣正田小僧
 山田飯富馬場相水跡能續り押
 渡り二万二千の大軍一度も其りけ
 ハ直江の備へ切崩されたり又川中
 島なる信玄の旗本敵の後より西
 徐山へ向へし味方の聲し引退へて
 一人も通ずるを不知し今迄敗せし甲州方
 誠意無増し眞田源太左門時分
 相水望月進やと攻けられ鐵槍
 今ハ必死と成り馳向ひ戦たま眞田
 昌幸の鐵槍を仕留めり從者
 馳廻りてさきへく働きをなすり
 血相立し御れり秀忠公に馬を渡り
 出陣し五百の御座りし時
 是れ時分はしと左右の
 大河一回り放せり



大御所より京都より南都までまきし幸村を
 奇束をのこし三百人へ間道を越へ
 進む又木村塙薄田の三人は矢筒を持て向ふ關東が勢も
 知らず明日で大阪へ出張せんと酒
 宴をなして有ける所へ分都を
 押立田利に神保長三郎の
 陣ま向ひ汝先君の大名を
 忘れ徳川は従わ大罪人と呼せられ
 神保大は駭き扱ふ柳分都に叛きしうた大勢を分都
 一柳の方も同じ謀とまくり向士討となり斯る所へ大首
 打ぐれ大御所大は驚きま玉ひ急き進
 れんと大久保安藤旗本五百余きて奈良をきて
 打立し分都の旗はた由利家康殿返り玉へ呼せし故返す
 所は神保一柳の旗はた海野三好も打て出火を敵て攻立
 大御所唯一騎切抜玉いて大久保く成瀬くと頭玉を彼の武者
 突了否上田城主真田幸村也又敵馬を逃出玉幸村

真田幸村

徳川勢



七呼はり近付鎧延て突指し運強り
 けん鞍山を突争三四度なり此時一丈余の大溝
 を飛越へ進れ玉幸村溝ま打入り跳り越さ
 延玉ひ夜明け一人の男門を開き居れ大御
 所が我を隠し吳後日履美与やの玉へ承諾し
 の内へ入り奉り此者後梅屋屋左衛門江谷町頭也
 斯て慶長十九年關東三千余萬の兵大阪城攻り真
 田幸村の沸粥を灌せ又ハ鎧卯を投教千人なませ釣瓶の
 策を以て千五百人一同に押潰し奇平の諸軍思れて退
 きけり關東方真田の丸を攻あぐみ十二般備へ番
 手攻まなき企てたり十二般の内七般まで破る
 十九年十一月大御所茶臼山本陣を搦新將軍
 任言を本陣ます幸村抜穴より茶臼山打向の件大
 助謀計を言合の注言なる秀忠公の御陣ま向はせ
 ける茶臼山近辺の火の手驚き人数つろひ住言ハ
 手薄き所へ突然と鯨波の言を揚言音は我々真



田幸村の子大助治孝へ父幸村已大
御所の御首を申受候新將軍も御
首渡さるべしと荒廻り新將軍の本陣
の後より扈從五六人まで乗出し玉ふ
大助例の強弓を放つ御運強うけん御後の
松村治郎兵衛が首射後たり
打死五百斗
り大坂方三百斗り大御所より
覚束なく一度和議を致す時節を伺玉ひり
扱し真田幸村が幸登城有けれ秀頼公定殿吉老
七組出仕有り長島我部木村も来り其計り家
康の首へ打て仕損じない大助も後の事を示し
雑兵の武器を陣笠を冠り村正の太刀横たへ宿願符
と火繩小すの鉄炮を携へ松屋町通り前山行日本田の
下へ行逢是幸ひと刀切例し懐中より
割符灯燵を奪ひ是より諸々の面を

真田幸村



初も真田幸村大助治孝
妙計頭も井原右大野元
其傍女の侍衆は日月の光
りし薄く成登巨象連の處
たる関東方大御所へ定着
大野真新より出る諸將打死を
死も近うさへし関東方平野へ軍
近きま有と諸將を遊井の敷の中は伏又大助
八五百目の大筒を打ち増田根津を差添
同じ等地は伏せしを板大久保へ井伊
藤堂出陣の事を次は我身へ御供し大御所は
馬を止ませ玉ふ衣由我部引退き八足
我心を強の人謀計を新しう龜井村の南
平野の方をたどり玉ふ天下を握る洪福の備
り玉ふ致さる召れし馬しきりさ嘶き足くさし
大御所御心地例をいす急下馬玉おや

後藤基次

徳川内府家康公

否、大助が打放つ大筒を撃を打たく馬に伏倒れ微塵も成て失はけり、元山始の伏兵一度は敵の
 中より起り立ち烈風はこり龜井村の一面は燃え上り安藤治左門早も君を策うへは極き兼
 後ろの森まで処行さる大坂勢鯨波を作りて追討は火炎まきさく人々斯々旗本勢多
 く討た大保の鉄炮の音火の手を見らり其身は鎧取て打て出敵を左右は突ちり大御所ハ
 其隙は進れ玉ふ水野五左門ハ急場の義御免有れ御陣羽織を給いて路止り散々切ま
 くり終り討死す大御所ハ辛じて危三ツ外を逃れ玉ふ總身米も添こし將葵の紋の陣羽織陣
 笠深く冠り源家康討死の覚悟と叫ぶる者あり大御所見至るは余人あり大久保忠教ハ嗚
 呼忠なるをなぐと云ひ捨てて進れ玉ふ御運の程を自出度けれ猶此後も真田幸村骨を影まて身を碎三
 肝膽をこいて御けり猶平野の戦ひ大御所幸三目せ参らせけれ共秀頼公の叔父なる浅井國助守も交心
 して関東は心を寄せ淡君大野が我終有名なる大冷分も追々打死し建も此孤城まで御運の関く事思ひ
 もまらずと決定し本村長曾我部後藤の面々秀頼公の御前さ出幸村涙と井ま赤心を吐露し君を二度
 薩摩國は落し参らせ御開運を待へしと申上げれ秀頼公涙ながら御承知在り本村重成は後の
 事を大勢注し夫々用意なし御供は真田幸村同大助長曾我部父て後藤又立其外真田の臣下
 も百五十人密に城中の抜穴より豊田まで忍び歩行し此所まで薩
 原の家臣伊集院那部御向ひは出兵庫より御船を召れ薩原の國
 へ落延至り関東へ秀頼微運を悟り今日切腹開城の段申送る

明治三十二年二月十日 印刷
 明治三十二年二月十日 出版
 編輯兼出版人 大坂市東區堀江松田橋本町
 印刷人 大坂市東區堀江松田橋本町
 田中三

